平成 19 年 5 月 2 日　VoL.226

お忙しくても、約 2 分間で読めます

ハートフル・ワード（心からの言葉）

山内公認会計士事務所

TEL 098-868-6895
FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

周りの情けや思いやり、助けで経営者の想いは形になる

佐瀬　守男（ホットランド社長「本社・桐生市、年商 107 億円」たこ焼き「銀だこ」で外食の新ジャンルを切り開く）

1．今から 12 年前、私が「築地銀だこ」の製法を完成させたばかりのころの話です。全国のたこ焼きを 2 年間食べ歩いて開発した銀だこ、外がぱりっと固く、中がとろりとした食感が特徴。日本中どこにもない独自商品で、私は事業の成功に自信満々でした。「縁日からともかく、たこ焼き専門店をテナントに誘致するなんて聞いたことがない」。こんな理由で、出店スペースを提供してくれる会社は見つかりませんでした。

2．1 年半後、あるスーパーがチャンスをくれました。1 週間、店内の遊休部分で営業して評判が良ければ、スペースの提供を考えると約束してくれたのです。私は、ホームセンターへ走り、木製の仮設店舗を手作りしました。結果は大成功。初日から長蛇の列ができたのです。遠回りはしたけど、4 年間の苦労がやって報われるー。そう思った最終日の夕方、「店がボヤを出しました」との連絡を受けました。

3．しかし、徹夜で掃除をし翌朝謝罪に出向いた私への店長の言葉は「ごくろうさん。ただし、出店の条件が 1 つあります。二度とボヤが出ないよう、安全対策を万全にすることです」意外なものでした。店長は、私がチャンスを頂いたお礼に、毎日早朝、スーパーの駐車場を掃除する姿を見て、その心意気に免じてボヤの件を大目に見ようと思ったのでした。

4．どんなアイデアでも、経営者一人の力では物事は決して前に進みません。周りの人々の情けや思いやり、助けがあって初めて経営者の想いは形になる。だからこそ、経営者は社員や関係者など周囲の人間に感謝し、幸せにする義務があるのです。

（参考：「日経ベンチャー」2007 年 2 月号）

ワンポイント経営アドバイス

よい戦略にはイノベーションがある

マイケル・ポーター（ハーバードビジネススクール教授）

1．よい戦力というものは、企業が適切なゴールを持つことから始まる。日本企業のゴールは、成長や規模の拡大から、利益やＲＯＩＣ（投下資本利益率）にシフトしている。その点で日本企業がよい方向に向かっていることは疑いの余地がない。従来、日本企業はあらゆる製品をつくり、あらゆる産業に進出することで、需要を満たそうとしていた。しかし、今や、ゴールは利益（を生み出すこと）になった。

2．日本企業は、多くのリストラを行った。事業部門を創設したり、あるいは売却したり、株式の持ち合いをやめて、提携先の製品の取り扱いをやめたところもある。日本企業には「しなくてもよいことは何か」という考えが一気に広がった。よい戦略にはイノベーションがある。よい戦略とは、一つしかない分野を創り出すことが含まれているからだ。イノベーションという言葉が、今の日本を表す言葉になってきたと思う。

（参考：「週刊東洋経済」：2007 年 1 月 20 日号）

経営者のための経済学

東京への人口流出は止まる

片山　善博（鳥取県知事）

1．東京は移民を集める米国に似ている。これだけ地方から若者を集めれば、活気が出ないはずがない。しかし、やがて臨界点が来る。これまでは仕事がないから東京へ行く若者が多かったが、地元でも子供の数が少なくなり、むしろ仕事の方が多くなってきた。東京への人口の流出は恐らく 10 年のうちに止まる。その時、東京は非常に困った状況になるだろう。

2．古典的と思われるかもしれないが、人口と機能の分散を図るべきだ。例えば、雇用情勢の悪い地域は法人税率を下げるとか、1 国多制度の仕組みを作ればいい。企業は工場を建てる時に、日本か中国かという 2 つの選択肢しかなかった。1 国多制度になれば、「税金の安い鳥取にしようか」という新たな選択肢が生まれる。

（参考：「日経ビジネス」2007 年 1 月 8 日号）

古典に学ぶ

眼を高く

「著眼高ければ、則ち理を見て岐（き）せず」

（訳）大所高所に目をつければ、道理が見え、迷うことはない。

（参考：佐藤一斎「言志四録」）：ＰＨＰ文庫